
香風

春 周沙

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

香風

【Nコード】

N5714E

【作者名】

春 周沙

【あらすじ】

私の中を通り過ぎていった柔らかい風。何年もの間、封印していたその恋愛は、今となっては自分にとって成長の一過程だったのかも知れない。人を愛するということの意味を教えてくれたと思った。

前編

とある自動車メーカーのショールーム。
年は若干25歳。淡いスーツに細めのネクタイが爽やかさを増す好
印象でトップクラスの営業マン。

「では納車は2週間後ということで。ありがとうございました。」
一組のご夫婦を見送る。

そのお客様は、ご主人は普通の公務員。
奥様は余り愛想はないが可愛らしい雰囲気の人。
お子さんは幼稚園と小学生の二人の男の子。
どこにでもある幸せそうな家庭に見えた。

職業柄、奥様に好印象を与えないと商談成立は難しい。
やはりお財布を握ってる奥様方が最終的OKを出すのが大多数です
からね（笑）
清潔感や好印象を与えるのも営業テクの一つです。

2週間後、無事そのお宅に新車を納車し、私はまたいつものように
忙しく営業に走り回っていた。
ある日、外回りから帰ると電話メモの中にそのお宅の奥様からのメ
ッセージが。

何か不具合でも？と気になり電話してみると・・・

「一度お会いしたいのですが・・・」と、言いにくそうながらも明るい声でそう言ってきた。

「申し訳ございません。そのような個人的なご用件にはお応えすることができないのです」

私は丁重にお断りをした。

営業をしてるとそういうこともなくはない。

ただお客様の奥様と個人的にお付き合いするなんて以ての外。

会社にバレたりすれば当然クビだろう^^；

でも少し気になり始めたのは事実だった。

数週間が過ぎ、たまたまそのお宅の近くを通りかかったのでインタホンを押してみた。

「新車の調子はいかがでしょう？」

「あら！桜井さん？どうぞお入りになつて。今コーヒーを入れますから」

「いえいえお構いなく・・・」

応接間でお車の調子や感想を伺い、他愛も無い話にしばし和やかな時間が過ぎ去った。

そこにはシヨールームで会ったその人とは違った笑顔の可愛い一人の女性。

彼女は私より7つも上とは思えないほど普通に若々しい。

「それではご主人様にもよろしくお伝え下さい。」そう言って私は立ち上がった。

彼女も嬉しそうな笑顔で「今日はありがとうございました」と玄関

まで見送ってくれる。

少し安堵感に似たものを感じながら玄関に下り靴を履いてると、不意に私の背中に黙って彼女がぴたりと寄り添ってきた。

なんとも言えない柔らかな香り……

驚いて振り向き、私は彼女の肩に両手を乗せて制止するように少し冗談めいたように言った。

「ダメですよ。ほんとに好きになっちゃいますよ?」

「……いいの」

「え?……」

正直驚いた。

微かな言葉。そして大きな瞳。

長い沈黙の後、思わず彼女を抱き寄せてしまった。

ふと我に帰り、「やっぱりダメですよ。。自分を抑える自信がなくなってます」

そう言うのが精一杯なのが自分でも分かった。

「いいの……」

再び見つめ合い……

そして張り詰めてた1本の糸が切れた。

次の瞬間、唇を激しく重ね合い彼女を再び強く抱きしめていた。

* 後編へ続く

後編

私は部屋のソファアに深くもたれかかり、昨日の出来事を何度も想い返していた。

自分の中に不思議な感情が芽生えてた。

でも・・・

お客様の奥様とこのような関係になるなんて・・・しかも不倫関係なんていい訳がない。

思いを打ち消そうとすればするほど、高まってきてどうしようもない。

長いキスが何度も何度も蘇ってくる。

それから1週間後、私は彼女を私のマンションに招くことになる。

初めての不倫・・・

でもそんなことはもう考える余地さえなかった。

彼女を部屋に招き入れ、少し話した。

車が納車されてしまえばもうあなたと会う機会も無くなってしまったんだ・・・

そう思うとなぜか急に私の事が気になり出したと言う。

そしていてもたっても居られず、電話をしてしまったらしい。普通では考えられない、でも電話をせずにいられなくなった。

理屈じゃない彼女の言葉に耳を傾けていた。

後はもう言葉は要らなかった。

重ねあつた唇。

少し開いた胸元へとゆっくり顔を埋めていく。

嗚呼・・・

彼女の吐息が切なくも熱くそして悦びへと変わっていく。
白くスラリと伸びた足をそつと開き・・・

夢中で抱いた。

まだそこには愛は存在してなかったのかも知れない。

欲望のまま、そして彼女に求められるままに。

いけない恋だと自覚すればするほどそのスリルを味わいながら彼女を抱いた。

こうして私は彼女に溺れていくことになる。

平日が休日の私と彼女の自由になる昼間の時間がぴったり合い、毎週私の休日には彼女との情事を楽しむ生活が始まりました。

どう見てもこんな恋愛なんてしなさそうな彼女がどうして私を誘ってきたのか・・・

別にご主人や家庭に不満を持ってるわけではない。

ありきたりの幸せに不服を言うタイプでもない。

ただ・・・あるとき彼女が言った。

私、このまま終わっちゃうのかな・・・って思ったって。

真面目で経済的にも問題ない公務員のご主人との結婚生活。

それは自分が想い描いてた愛が満ち溢れた生活とはかけ離れたものだった。

他人からすれば、とんでもない贅沢者かも知れない。

でも、夫婦の内情は本人しか分かり得ないもの。

誰にも話せないその感情を彼女は私にぶつけたかったのかも知れません。

そんな彼女の気持ちは今でこそ理解できるが、当時の私にはいまいちピンと来なかった。

ただただ彼女の体に溺れていった。

こんな関係が2年ほど続き、将来への夢も持ち始めた頃、少しずつ彼女と連絡が取りにくくなっていった。

どうもご主人に少し怪しまれてるような感じ。

それに子供たちが、何か分からない不安に敏感になってる。

彼女が私の所へ出かけようとすれば、急に熱を出したり具合が悪くなったり。

この頃から少しずつ彼女がこの関係を負担に感じ始めたようです。

まだ若かった私にはそこまで大きく彼女を包み込んであげることができなかった。

ただ、会えない寂しさから飲み歩く日が増えていった。

今のようにメールもないし、彼女となかなか会えない日が続いたけれど、私はそれでもよかった。

会えるときだけでもいいから今の関係を続けていきたくった。

だけど彼女は違っていた。

年上ということもあり、自分が線引きをしなければ将来のある身の私を更に狂わせてしまう。

そんな思いもあつたんでしょね。

もう終りにしましょう。

それは私にとって到底納得できない言葉でした。

* 完結編へ続く

完結編

どんなにあがいても もう元へは戻らない。

どんどん離れていく彼女。

女性は一度決断したら固いですよね。

それに比べて私は未練たらたら。

かと言って彼女を強引に奪いにいく力もなし。
情けないですが、寂しさを紛らわす荒れた日々が続きました。

後になって分かった話ですが、
彼女が私に別れを告げてしばらくして、彼女は意を決して家を飛び出し、私の所へ来たそうです。

でも私は飲み歩いてたため家にはおらず、そんな彼女を迎え入れてあげることができなかった。

どんな気持ちで飛び出してきたのか・・・思うだけで涙が溢れた。
結局は彼女の真意を分かってあげられず、信じてあげることができなかったことを悔やんだ。
自分の心の小ささを恥じた。

だけどその時の自分は一杯一杯でした。

25歳にして経験したこの恋愛は、終わってからたくさんのことを

学べたと気付いた恋愛でもありました。

自分中心では女性を幸せにできない。

家庭の中にいる人を愛するということは、その人だけを愛すればいいというのではない。

一つ成長することのできた恋愛。

そう思えば彼女に感謝ですね。

数年後、彼女と会う機会がありました。

私と別れてからは、育児に専念し、ご主人とも何事も無かったかのようになんとか上手くやってる様子。

当時あんなにぴたりと合ってた二人だけど、もうお互い全然違う波長になってると感じました。

ただ、なんとも言えないあの柔らかな香りだけは変わっていませんでした。

懐かしさとともに、心の中で本当の意味で彼女に別れを告げました。

* 完

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5714e/>

香風

2011年1月22日14時36分発行